

磯貝武連

挿絵 シロクマA

僕のエッチなしでは
学園最強の
ロイノが
最弱になる件

2DB
ニジロクノムスビ

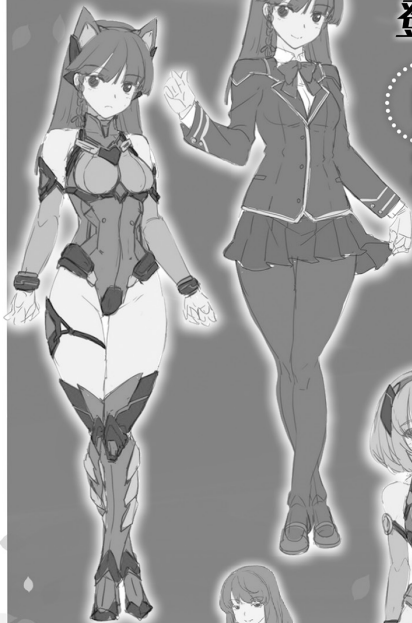
試し読み版

第一章	ヒロインとサボり魔	006
第二章	体育倉庫と強化服	066
第三章	お泊まりと記録	100
第四章	二人の秘密とアイドル少女	140
第五章	少女の怒りと決着	180
最終章	二人の少女と一人の少年	215

登場人物紹介

ひなせ りんか
日生 綾夏

武持学園でトップクラスの実力を持つ優等生。世界でも唯一の二刀流の使い手。



くぬぎ とかこ
功月 十和子

武持学園の教師。教師というよりは偏屈な研究者タイプ。



むらせ りゅうへい
村瀬 龍平

武持学園に通う落ちこぼれの武装者。

いちじょう
一条 カリン

普賢学園に通う武装者。持ち前のルックスを活かしてアイドル活動も行っている。



第一章 ヒロインとサボり魔

広い空間に少女が立っている。流れるような黒髪に同色の瞳。飾り気のない顔立ちはそれだけで十分に美しい。彼女は身体にピッタリと張り付くようなデザインの特種なスーツを着ていた。そのスーツの所要所には保護パッドがついていて、何かしら格闘技やそれに類するモノの防護服や強化服である事は明らかだ。

そんな身体のシルエットがハッキリ出る強化服に包まれた彼女の肢体は若々しく、それでいて艶っぽい。胸や尻の膨らみは既に少女が女になり始めている事を周りに示している。そこに年頃の男がいれば目を釘付けにせずにはいられないだろう。

それほど美しく均整のとれた身体を魅せる少女が体育館ほどもあるドーム状の密閉空間に一人で立っていた。何かを待っているような彼女の耳にはマイクと一体になったヘッドセットが装着されていて、やがてそこに通信が入ったのか何かを答える仕草をする。

そして一息吐いた少女は手に持っていた携帯端末のような代物を操作する。一見すればそれはスマートフォンを弄っているように見えた。年頃を考えてもそれは妥当だろう。友人からの通信に返事を送る、そんな姿にしか見えない。しかし少女が手の平サイズの端末に「アクティベーション！」と声をかけた瞬間、その様子は一変した。

端末が淡い光を放ったかと思うと、何もなかったはずの空間に突如光の線が走った。

まるで誰かがそこでペンライトを振り回しているような光だった。

しかしそこには少女しかおらず、そして彼女はただ佇たえずんでいるだけである。

何も無い空間が起こす発光現象、それはやがて光を収束させ質量を持たせる。光が物質化したのだ。少女が端末を弄ってからここまで僅か数秒、その間に虚空に光が走りやがて収束しそして物質化する。それはまるで出来の悪いCGのようだった。だがそれが幻像ではない事を少女がすぐに実証した。虚空の光が形をなした物をその両手に握り締めたのだ。それは二振りの刀だった。日本刀を模しているのか、大小片刃で鏢のある独特の形状をしている。しかしどこか機械じみた意匠が細部にはあって、それを素直に日本刀と呼ぶのは少しばかり憚られる。そんな代物である。

そんな二振りの刀を左右の手に握った少女は慣れ親しんだ重さを確認するように何度か振るってみせる。細腕のどこにそんな筋力が隠されているのか、軽々と刀を振り回す少女は柄を握り直すと口元のマイクに「始めて下さい」と語りかけた。

声をかけてすぐ、その密閉空間に異変が起きる。複数の警告灯がつき、ビー、ビー、という耳障りな音と共に日本語と英語で警告音声の流れ始める。

『ただ今より兵器の搬入が開始されます。武装者は速やかにPDWの発現を開始して下さい。武装者以外の方は直ちに避難口より退避して下さい。繰り返しします……』

普通ならば驚いて身構える状況だろう。しかし少女は緊張する様子もなく、黙って前方を見据えていた。すると彼女の視線の先、何重にもロックがかかった分厚い防弾防熱扉が

開いてゆく。派手な音を鳴らして開いた扉の奥からは、その開閉音や警告音さえ霞ませるほど異様な物体が出てくる。全長十メートル、高さは三メートルあるそれは四つ足の獣だった。ただし鋼鉄で出来た獣である。

多脚型自走式戦車。暴徒の鎮圧などに使われる兵器で、高い効果と実績を上げている。彼女の前に現れたのはその最新機だ。モノアイカメラを忙しなく動かす多脚戦車は少女の姿を認めるとそこに焦点を合わせて内部の人工知能で分析を開始する。

敵と認識するまでは一秒、警告なしの攻撃を開始するのはそれよりも短い時間だった。

ドドドドドド!! という耳をつんざく発射音と共に機関銃から発射される銃弾が少女の身体を粉々に弾き飛ばす——という幻を見た者は果たしてどれほどいただろうか。

瞬く間に弾倉一つ分の弾を撃ちきった多脚戦車が状況分析を開始すると、弾着した地点で巻き起こる煙の中から少女が飛び出すのはほぼ同時だった。

多脚戦車の人工知能が瞬時に反応し近接弾頭に切り替えるが、その一瞬の際に少女は握っている二刀を交差させるように振り抜いた。少女の力で、しかも使っているのはただの刀である。だが多脚戦車の脚はそれにより切断された。多脚戦車は構造上脚部を一番強く作っている。素材も上部装甲より脚部装甲に強靱な物を使用するほどだ。その脚部を少女はその細腕から繰り出した二刀の一撃で真つ二つに斬り裂いたのだ。

綺麗な断面からは斬られた事に今気が付いたようにオイルが漏れ始め、バヂバヂ！ と音を上げて火花が飛び散る。慌てたように人工知能は残る三脚での体勢維持を行おうとし



た。

けれどそれは無駄な努力だ。残りの三脚総てが既に少女によって斬られていたのだから。ドシン!! と音を立てて多脚戦車の本体部分が床に落ちた。重さと衝撃に衝撃吸収素材で出来ている床にひびが走る。何が起こったのか理解出来ないようにカメラを動かす既に多脚ではなくなった戦車は、その視線の先に少女を見つけた。

恐怖も悲しみも感じない人工知能は単純に敵と認識した者を破壊すべく、生きている砲塔を少女に向けた。駆動音を響かせて砲塔が回転する。だが狙いを定めた時その場には誰もいなかった。カメラが姿を探すように走る。そして一点で止まった。そこには華麗に宙を舞い戦車の上部に降り立とうとしている少女の姿があった。

機械であるはずの人工知能はそれに見惚ほれるようにカメラを向け固まる。そしてガギン! という音と共に総ての活動を停止させた。人工知能が収まっているコックピット部分に少女の二刀が突き刺さったのだ。豆腐を包丁で切るような容易さで戦車の装甲を刺し貫いた少女はゆっくり刀を引き抜くと息を吐いた。これだけの動きを見せて少女の額には僅かな汗しか光っていない。その汗は彼女を何倍にも美しく輝かせていた。

総てが終わった事に安堵したのか、戦車から降りた少女は笑顔を見せた。一輪の花が咲いたような可憐な笑顔で……そんな笑顔のまま映像は一時停止された。

部屋の明かりが点ってゆくと、その場にいた誰もが呼吸をする事を思い出した。あまり

に凄まじい戦闘映像に皆様に息をする事さえ忘れていたのだ。遮光カーテンが自動で開き外光も部屋に入ってくると、教師が座っていた椅子から立ち上がり教壇に立った。

「さて、今観て貰ったのがこの間行われた日生ひなせによる模擬戦闘の映像だ。観て分かると思うが、武装者の戦闘能力は現代兵器の殆どほとんを凌駕している」

教師の説明に聴き入る生徒達だが、その視線はチラチラと教壇ではない方へと向かっていった。それを分かっているながら教師は解説を続ける。

「今回使用されたのは安達重工が昨年発売したばかりの新型だ。つまり現行最強の対人陸戦兵器とも言える。しかし、それでも武装者とそのPDWの前にはオモチャに等しい」

少し大袈裟な教師の解説に含み笑いを漏らす生徒もいたが、彼らでさえ目の奥には真剣な光があつた。教師はそんな生徒達に真面目な声で言う。

「だが、それも日々の修練があつてこそだ。自らのPDWの特性を理解し、そして強化された身体を自由に操れてこそ、真に一流の武装者と言える。そこにいる日生のようにな」

その言葉に今度こそ全員の視線が一人の人物に向けられる。視線を集めた少女はどこか照れたようにはにかんだ。その顔はスクリーンに映し出されている笑顔と同じものだった。

日生綾夏あやか——それが少女の名前だった。映像でもその可憐さは充分証明されていたが、現実に見ると一層美しさが際立っている。

今はタイトな強化服ではなく学園指定の制服を身に纏まとっているが、その瑞々しい肉感は伝わってくる。頬を染める顔は整っているながらもどこかまだ幼さを残していて男の庇護欲

を誘う。とてもこの少女があゝの恐るべき対人兵器を破壊したとは思えない。だがそれが真実である事をここにいる全員が知っていた。

故に綾夏へ向けられる視線は尊敬、崇拜、憧れなどばかりで、それが綾夏はくすぐったそうでもじもじしていた。教師は綾夏が照れているのを教壇から見て小さく笑うと、彼女を慕う視線を向ける級友達に声をかけた。

「皆も日生を見習って勉学と修練に励み、一流の武装者を目指して努力するように！」

激励の声にクラス中から「はい！」という熱意ある声が返ってくる。それを聞いた教師は頷いて、早速授業を始めようとした。その時綾夏がおずおずと手を上げる。

「あ、あの先生……」

「ん？ どうした日生？ 質問か？」

「え、つと……私の映像は……いつまで……」

スクリーンにはまだ微笑む綾夏の顔が映し出されたままだった。教師は「すまんすまん」と苦笑すると慌てて映像をオフにする。

「けど、日生の顔だったら映ったままでも文句は出ないんじゃないか？」

冗談めかした教師の言葉に笑い声が巻き起こる。綾夏はそれに「先生！」と真っ赤になつて文句を言った。そんな活気に満ちた教室の一番隅の席で、ただ一人加わる事なくポーンと外を眺め続ける少年がいた。同じ制服を身に纏っているがどこか馴染んでいないような様子で、級友全員が綾夏に視線を向けた時も一人だけ外を見つめ続けていた。

けれど耳は教師の声を捉えていたらしく、誰にも聞こえないほど小さな声で、

「……見習えって……元が違うのにどう見習えばいいんだよ」

少年の呟きはふて腐れているというよりもどこか諦観を含んでいて、届かない何かに対して総てを諦めたような感じがあった。それが希望に燃える級友達とは違う雰囲気なるみりゆうへいを彼——鳴海龍平に纏まとわせているのかもしれない。龍平は一度だけ呟くとそこからは何も言わず黙って外を見つめて、一刻も早くこの時間が終わらないかと念じ続けた。

ssssss

ようやく授業が終わると昼休みになった。クラス中から喧噪が響くが、その中心にはやはり綾夏がいた。席を取り囲むように輪を作る級友達はさつき観た映像についての質問を繰り返している。「怖くなかったの?」という単純な問いから、戦車の素材や人工知能の反応速度への質問など様々だ。その総てに綾夏は丁寧に答え続けた。

「模擬戦前にマシンスペックはある程度把握出来ていたし、それに実弾じゃないから怖さはあまり感じない……かな。あと装甲に対しての切断は」

鈴を鳴らすような可憐な声に皆が聴き入る中、龍平は鞆の中から今朝コンビニで買ったきた調理パンを取り出すとそれを持って教室を出て行った。綾夏と違い龍平が何かをする事に対して反応は一切ない。だがそれは当たり前の事なので一々何かしら感情を抱く事もなく、龍平は一階廊下にある自販機で紅茶を買おうと屋上に足を向けた。

屋上は出入禁止になっていて鍵がかかっているが、東棟の屋上へ続く踊り場の窓の鍵が

前から壊れている事を龍平は知っていた。だからそこから屋上に出る。

校舎中どこから見ても見つからない死角になった場所に腰掛ける龍平はパンを食べ始めた。晴れた空の下、誰とも喋る事なく食事をしていると不意にさっきの事を思い出した。

あの凄まじい戦闘の記録、そして教師の言葉。思い出すだけで食欲がなくなる。

生まれ持つての才能に優れた身体能力。そしてそれを支える周りの環境。総てが揃って出来上がった『天才』と呼ばれるモノにどうやってなれというのだろう。

馬鹿馬鹿しくなつて龍平は食事もやめ、屋上の床に寝転がるとポケットから自分専用のデバイスを取り出す。それは綾夏が映像の中で使っていたのとそっくり同じ物で、ただ色だけが違っていた。龍平はそのデバイスを強く握り締めると……何もせず息を吐いて空を見つめてから目を閉じた。

そして何故自分がこんな気持ちにならなければいけないのかと考え始める。

人間の身体に未知のエネルギーが流れている事が発見されたのが今から数十年前。それとほぼ同時にそのエネルギーを物質化する技術が発明された。特殊な機器を通す事により物質化されたそれは、現代のどんな工業機器や兵器でも破壊する事が不可能だった。

夢の物質を人間が無尽蔵に作り出せる。そう喜ばれたのは一瞬の事で、すぐに人間が一度に物質化出来る量には限度がある事が判明する。それは精々手で持てる程度の重さ長さに限定され、他人と協力して作り出す物質を大きくする事も出来ない。

一人一人が個別でしか物質化が出来ず、するにしても決まった大きさの範囲内。しかも一定以上のエネルギー量を保有していないとその物質化さえ無理。

そんな使い勝手の悪さからやがてそのエネルギーはエクストラエナジー（余分な力）と呼ばれるようになり、それを物質化させる技術も忘れられていった。

しかし数年後、ある企業がそれによって目をつけて技術を進化させた事により状況は一変する。その企業は物質化するエクストラエナジーを兵器転用する事を考えたのだ。

どんな物でも破壊が不可能という事は、逆に言えばあらゆる物質を一方的に破壊出来るという事。そう考えた企業はエクストラエナジーを物質化する際に指向性をもたせ、刃物や棒などに変化させる研究を進め、やがてそれに成功する。

そしてその研究課程でエクストラエナジーを身体の外に薄い膜のように展開させ、それを補助として身体能力の強化を行う事も出来るようになった。

つまりあらゆる物質を破壊出来る武器を持った超人を作り出す事に成功したのである。すぐにその研究は世界中に広まって、あらゆる企業あらゆる国家が独自に研究を進めた。

何せそんな超人達がいれば治安維持や国家防衛に役立つのは明らかだ。

やがてどの国でもエクストラエナジーを武器化する事が出来る者の保護と育成が国体維持の第一課題となつてゆく。その頃には武器を作り出せるほどのエクストラエナジー量を保有する者達を「武装者」、そして武装者が使う武器を「PDW（パーソナル・デバイス・ウエポン）」と呼ぶようになった。

ここ日本でも武装者の保護育成には力を入れており、列島の各地には武装者を教育する為の特別な教育機関が作られていった。龍平が通うこの「武特学園」もその教育機関の一つである。つまりそこに通う龍平も武装者の一人なのだ。

だが武装者といっても人間だ。その能力には個体差があり、ハッキリ言えばピンからキリまで存在する。そういう意味で言えば龍平は間違いなくキリだろう。

P D Wを発現させられるギリギリのエクストラエナジー量しか持たず、身体強化に回すほどの余裕は殆どない。体内を流れるエクストラエナジーは生まれつきその量が決まっただけで一生の内でも殆ど変化しない。つまり龍平はどうやっても綾夏のようにはなれないのだ。小さな頃はそれでも努力して他の部分で補えばいいと信じて、近所の空手道場に通って毎朝毎晩トレーニングを行ったり嫌いな牛乳を毎日飲んだりしていた。だが生徒同士の模擬戦が行われるようになる中等部に上がると、その想いは脆くも崩れ去った。

初めての模擬戦で龍平は同級生に一方的に攻撃され続けた。小さな頃から覚えた空手の技も、日々のトレーニングも、デバイスによる身体強化には敵わなかったのだ。

そんな龍平の姿を見て担任だった教師はその日から模擬戦に出す事をやめた。それは今日までずっと続いている。そして龍平もその日から総てを諦めたのである。

努力する事も頑張る事も総て何もかも「才能」と呼ばれるものには敵わない。だったら無駄な努力なんてするだけ損だろう。そう考えて日々を送るようになった。

そんな龍平にとって綾夏は厭うべき「才能」と呼ばれるものの権化だった。

保有エクストラエネルギー量は世界でもトップクラス。身体強化を行えばさつき見たように対人兵器さえ凌いでしまう。おまけに実家は世界に名だたる「HINASE」である。

HINASEはエクストラエネルギーを物質化する時に必要な機器『デバイス』の基幹部品の一つに特許を持っている企業で、日本国内ではデバイスの製造販売も行っている。

自身が優れた武装者であるだけでも充分なのに、そんな大企業の一人娘だなんて出来過ぎだ。神様というのがもしいるとするのなら、一体どれだけ綾夏を鼻^{ひいき}負したのだろう。そんな風にさえ思ってしまう。

もし龍平が武装者でなければもつと素直に綾夏を妬む事も羨む事も出来ただろう。だが最底辺にあるとはいえ武装者であるという事実がそれを許さなかった。だから龍平は綾夏を見ないようにした。あまりに眩しくて妬ましくて、意識すればするほど自分を惨めに思えてしまうから。だから綾夏の事を考えないようにした。

けれど教室に戻れば嫌でも綾夏の話が耳に入ってしまうだろう。何せあの戦闘映像は凄かった。なので龍平はそのまま屋上で寝る事にした。サボりである。

放課後、誰もいなくなった頃に鞆を取りに行つて帰ればいい。教師陣も龍平のサボり癖は知っているから心配しないはずだ。そう思つて腕を枕に目を瞑つて眠り始める。

それから数時間後、夕方の風が頬を撫でる頃にようやく龍平は目を覚ました。

久伸あくびをしながら身体を起こし、制服についた砂埃を払う。硬いコンクリートの上で眠ったせいで身体が痛かったがそれを無視して踊り場に戻り教室へ向かう。

夕陽に染まった校舎には運動部のかげ声とブラスバンド部の音が微かに響くだけだった。自分のクラスの扉を開けた龍平は、そこで思わず顔を顰しかめてしまう。誰もいないだろうと思っていた教室の中には一番会いたくない人物がいたからだ。綾夏である。

綾夏は教壇の傍で担任の女性教師と何やら話し込んでいたが、龍平の姿に気付いて視線を向ける。担任も同じく視線を向け、どこか咎めるような表情で、

「鳴海君。また午後の授業サボったでしょ？」

龍平はバツが悪そうな顔で「すみません」と頭を下げるとそそくさと自分の席に向かった。教師は何を言っても無駄だと分かっているのか溜息をつく綾夏に話を戻した。

「えっと、それで……明日だったわよね？」

「はい。ランカーだけの能力測定で総合訓練所に……それで、休校届を」

ランカーとは武装者のランキング上位者の事で、そのランキングは三年に一度開催される国家規模の対人模擬戦大会で決定される。

優秀な武装者の確保こそが国家の急務となっている現状、誰がどれくらい優れた武装者であるかを知っておくのは国家の義務……というのが大会開催の名目である。

綾夏は二年前に開催されたその大会で、学生の部優勝を飾っている。つまり日本の学生武装者の中で一番強いという事だ。そんな綾夏から提出された休校届の紙を受け取って女

性教師は教室から出て行った。鞆に勉強道具を詰めていた龍平は出遅れてしまう。

放課後の教室に可憐な少女と二人きりなんて、年頃の少年なら緊張するのが普通だろう。しかも相手は日本最強の武装者だ。けれど龍平の心に湧いてくるのは妬みになりきれない暗い感情で、それがつい口をついて出てしまった。

「……いいよな、才能があるつてのは……怒られずに休めて」

それは独り言のつもりだった。だがプラスバンド部の音も運動部のかけ声もやんだ教室に龍平の声は驚くほどよく響いてしまう。

「……ねえ、それって……どういう意味？」

険のある顔で綾夏が見つめてくる。しまったと感じる頃には龍平へと近づいてきていた。「どういう意味って聞いたんだけど……答えてくれないの？」

怒っている。当たり前だろう、あんな事を言われたら誰でも怒る。そんな怒りを向けられて龍平は言葉を詰まらせた。彼にとつて綾夏は自分という存在に気付く事なく一生を終えるべき存在だった。話しかけられるなんて想像もしていない。

今の愚痴だつてテレビを見てボソリと漏らした感じにしか過ぎない。そんな相手に「反応されて、何をどう言えばいいか分からず視線を彷徨さまよわせていると。

「聞いてたよね？ 事情があつて休むんだつて……君みたいにサボるわけじゃないよ」

担任教師が龍平に言った言葉を聞いての台詞だろう。言われた龍平は赤面してしまふ。自分の恥を晒された気分になったのだ。だがその恥ずかしさが却つて口を開かせた。

「に、似たようなもんだろ……能力測定なんて簡単な事をやるだけで出席扱いになって」「簡単って……した事もないのに何で簡単だって分かるの？」

「分かるさ。どうせ今日みたく自分が凄いんだっての見せびらかせてくるだけだろ？ ランカーにしてみればあんなの遊んでるのと一緒じゃないか」

「見せびらかすって……私そんなつもりであの映像を撮ったんじゃない。それに遊んでるだなんて……酷い」

本当に傷ついたような顔をする綾夏に罪悪感が生まれる。だがすぐに、

「遊んでるのは君の方でしょ。授業にも出ないで模擬戦だっていつも見学だったよね！」

綾夏が自分の存在を知っていた事には驚いたが、それ以上に怒りが湧いてきた。授業は確かにサボりだが模擬戦に出ないのは身体強化が殆ど出来ないもので歴代の担任に止められているからで、もし同級生並にエクストラエナジー量があれば授業も模擬戦も真面目に取り組むはずだ。それを知らないで言ってくる綾夏に反射的に声が出てしまう。

「ぼ、僕だって君ぐらい才能があればもう少し上手くやるさ！ 授業だって模擬戦だって片手間でチャチャッと済ませて……あゝあ、本当にいいよな生まれがいいってのはさ、それだけで人生楽出来るもんない！」

言った瞬間しまったと感じた。だが後悔は先に立たない。冷や汗を垂らす龍平が恐る恐る視線を向けると、俯く綾夏は小さく震えながら華奢な拳を握り締めていた。

「……それ、って……私が才能だけってこと？ 努力なんてこれっぽっちもしてないって

……そう言いたいの？」

静かに響く声に生唾を飲む龍平は掠れた声で「あ」とだけ言った。その返事にもなっていない声に綾夏は完全にキレた表情を見せた。どうやら彼女にとつて「才能だけ」という言葉は禁句だったらしい。逆鱗に触れられた綾夏がブレザーのポケットからデバイスを取り出し画面を操作すると同じくポケットに入れてある龍平のデバイスが反応した。

「え？」と声をあげてデバイスを取り出し画面を見ると龍平は驚きに目を見開いた。そこには綾夏から模擬戦闘の申し込みがきていた。

学生が授業以外で模擬戦を行いたい場合、デバイスでもう一方のデバイスに模擬戦の申し込みをして許可を取らなければならない。それを受けた相手が「OK」をタッチする事で初めてその二人は模擬戦闘を行う事が出来るのだ。学生同士がPDWで私闘を起こさない為に考えられた措置である。もしこれを行わずに勝手に勝手にPDWを発現させ使用すれば、その記録はデバイスを通し政府のコンピュータに記録され処罰の対象となるのだ。

そんな決闘を申し込まれた龍平は口をパクパクさせてしまう。学生ランキングトップの綾夏と、ランキングに載ってもいない龍平が勝負だなんてあり得ない。混乱していると、「才能だけって言ったよね？ 片手間の遊びだって……だったら間近で見せてあげる。私」

「ま、待って待って！ ランキングトップの日生さんと僕って……そんなのどう考えても話にならないだろ！」

「私のは遊びなんでしょ？ 真面目にサボってる君とは大違いなんだよね？ だからそれを証明するって言ってるの！」

言っている事はハッキリ言つて無茶苦茶だ。綾夏もそれは分かっているだろう。だがどうしても勝負したいのだ。自分がどれだけ努力してきたか、必死になつて技を磨いてきたか、それをどうしてもこの同級生に身をもって知つて貰わなければいけない。

獲物を狙う狼の目で見つめられた龍平は逃げる口実を懸命に考えた。そもそも許可さえしなければいいのだが、そうすればどんな目に遭うか分からない。

「待つてよ！ ええつと、ほら！ 先生の立ち会いもないとダメつて規則忘れてるだろ!？」

確かに学生同士の模擬戦は教員免許を持つ大人が立ち会わなければいけない規則がある。怒りでそれを忘れていた綾夏は顔を顰めると、

「だったら残つてる先生にやつて貰えばいいじゃない」

「もう下校時刻だよ？ こんな時間に訓練場の使用許可をくれる先生なんていないつて！」

とりあえず今は逃げるのが第一。明日は綾夏がいけないわけだし、その次の日には怒りも薄れているだろう。兎に角今は逃げる事に全力を出す龍平だった。

綾夏は龍平がどう足掻いても逃げようとしているのを悟つて尚更怒りが増してきた。あれだけ馬鹿にされて言い逃げなんて絶対に許せない。

そんな二人のいる教室の扉が開いて女性が顔を出した。綾夏や龍平の担任教師ではない、別な教師だ。だらしなく着たブラウスとスカートの上に白衣を纏っている女性教師はどこか眠たそうな目で二人を見ると声をかける。

「おーい、下校時刻だぞ。帰れ」

素っ気なくそう言っただち去ろうとする。龍平はその教師の姿に冷や汗を掻いた。こんな時間に訓練場の使用許可を出し、立ち会ってくれそうな先生がいるとすればそれは。

「くぬぎ功刀先生！ よかった。私達今から模擬戦を行いたいんです！ 立ち会って下さい!!」

綾夏の快活な声に「ああ？」と言った教師——とわこ功刀十和子は頭をボリボリ掻くと改めて二人を見つめる。

「……模擬戦で……お前ら二人……でか？」

十和子も一応このクラスの授業を受け持っているので二人の実力や成績は把握していた。片や日本でも最強と名高い美少女、片や学園どころか国でも最底辺に位置する凡夫。比べるまでもない。こんな模擬戦の申し込みは色んな意味で危険だから止めるのが普通だろう。しかしその普通が十和子には当てはまらない事を龍平も綾夏も知っていた。

「……まあ、いつか。早くしろ。私も早く帰りたいから」

よくないよくないと首を左右に振る龍平を無視して十和子は教室から立ち去ろうとする。先に模擬戦を行う訓練場に向かうつもりなのだろう。

この色んな事に無頓着、何に対しても無関心というのが十和子という女性の特徴だった。

そうでなければ妙齡の女性が夏場に熱いからといって自分の股間を団扇で扇いだりしないだろう。そのエピソードだけで十和子がどういう女性か知れるというものだった。

兎も角、許可が出た事に「よし」とポーズを作る綾夏はこれ幸いと十和子に声をかける。「あ、それと。鳴海君のデバイスが調子悪いらしくて模擬戦申し込みの許可を出せないみたいなんです。代わりに教員権限でお願い出来ますか？」

流れるように嘘を吐いた綾夏に「ゲッ！」と声を漏らした龍平は慌てて「嘘ですから！」と十和子に説明しようとする。しかし面倒臭そうに振り返った十和子は、

「あゝ？ 全く、ちゃんと修理に出しておけよ」

「ま、まってください」

そこまで言いかけた龍平だったが、それより先に十和子が持っていた教員用のタブレットを操作して二人のマッチメイクに許可を出す。「ぼん！」と軽い音が鳴って二人の模擬戦に許可が出た事がデバイスの画面に表示された。目の前が真っ暗になる龍平は逃げなきやと震える脚で走り出そうとしたが、綾夏がそれより早く手を握ってきて、

「ほら、行くよ！ 私の努力の全くない才能だけの力を見せてあげる」

にこやかに怒っている顔で龍平を引きずるように模擬戦訓練場へと連れて行った。龍平にとって小学校低学年の遠足以来初めて握る女の子の手だったが、そんな事を気にする余裕なんて今は存在しなかった。

広い訓練場の真ん中に立つ龍平は自分が何をしているのか一瞬分からなくなった。授業をサボってふて寝して帰ろうとしたら綾夏と鉢合わせして、そうしたら何故か模擬戦という名の決闘をする羽目になっていた。

夢ではないかと軽く頬を叩いてみるが、痛みが走ってこれが現実である事を教えてくれる。生まれて初めて血の気が引く音を聞いた龍平は膝がガクつくのを感じた。

その龍平の前では綾夏が準備を整えていた。逃がさない為にわざわざ龍平が見える位置の物陰に隠れてスカートの下にスパッツタイプの簡易的な防護スーツを穿いてきた綾夏は軽くストレッチを始めている。

映像の時に着ていたような強化服を着ないのは更衣室に別々に入ったら龍平が絶対逃げると思ったからだ。実際龍平はそれが最後のチャンスだと思っていた。

しかしどの武装者の学園でもそうなのだが、着用している制服にはある程度の防護処理が施されてある。それに方が一PDWが服に当たればそれが鎧でも破壊されてしまうのだから意味がない。そういう意味で言えば、適度に動きやすくてかつ丈夫な学生服はびつたりの戦闘衣装だと言える。なので綾夏は「このままでいいでしょ」と言って龍平に着替える隙を与えなかった。何だかんとん拍子に綾夏の望む方向に話が進んでいて、神様っていうのはこんな所も彼女に鼻負しているのかと思えてしまう。

そうするといつもの総てが馬鹿らしいという思いが湧き上がり、そこにあまりの緊張が混ざって龍平は青白い顔で笑顔を浮かべてしまった。その顔が馬鹿にしていると感じて綾

夏は今にも爆発しそうになる。

自分がどれだけ努力しているか、どれだけ血の滲む想いで頑張ってきたのか、それを分
かるうともしないで「才能」の一言で片付けた龍平が許せない。いや、それだけならよく
言われる事だからまだ我慢出来た。しかし龍平は綾夏が楽をしていると、総てを片手間に
やっていると言った。それだけは絶対に認めるわけにはいかないのだ。

激しい想いを込めて睨み付ける綾夏の視線に、獲物と化した龍平は足が竦み逃げる事さ
えままならなくなる。

何とかしなきや。生存本能が訴える叫びに必死で頭を働かせて龍平は綾夏に謝ろうとし
た。今更格好悪いがそんな事言っていられない。何せ命がかかっている。あんな対人兵器
相手に無傷で勝った化け物相手に自分みたいな小動物はどう足掻いたって勝てる道理がな
い。

謝ろう。必死に謝ろう。そうすれば……なんて考えている内に監督室にいる十和子の声
がスピーカーから響いた。

『さっさと始めろ。こっちも忙しいんだよ』

気の抜けた声に意識が行っている内に綾夏が自分のデバイスを操作していた。アプリを
起動しコマンドを音声入力する。

「アクティベーション!!」

綾夏の声紋にデバイスは反応。彼女の体内に流れるエクストラエネルギーに指向性を持た

せ物質化させる。淡い光が綾夏の左右に走り始めた。やがてそれは二振りの刀となる。デバイスをロックして制服のポケットにしまった綾夏は自分の左右に形作られた己のエクストラエナジの結晶体を握り締める。

思わず息を飲む龍平は綾夏とその手に構えられた二刀一对の刀に見惚れた。

《おうちらい桜雷・にとうてんげん二刀天元》

——デバイスを管理するメインコンピュータがランダムに決めるPDWの個別名選定によりそう命名された綾夏の個人武装。世界でも唯一の二刀武器だ。

世界中で登録されているあらゆるPDWにはそれを発現させる際の原則とでもいいうべきものが存在した。それは、PDWの形状は自分では決められず変更も出来ないという事。そしてPDWは一つの武器にしかならないという事だった。

つまり槍だろうが刀だろうがヌンチャクだろうが何にでもなるPDWだが、一度に二つ出てくるといふのはあり得ない……はずだった。

それが綾夏の登場によって崩れた。まだ実用化されて十数年程度と歴史の浅いPDWだがこれは一大事件で、それ故に綾夏は世界中から注目的になっている。

クラスメイトとはいえ、殆どの実技授業をサボっている龍平にとって綾夏の《桜雷・二刀天元》を間近で見るのはこれが初めてだった。映像で見るとは段違いの美しさ、武器としてだけでなく芸術品としても通用するほどの完成された美がそこにはあった。

なんて見惚れている場合ではないと龍平は首を左右に激しく振る。あの芸術品に今から斬られるかもしれないのだ。PDWの攻撃を防げるのは同じPDWか、もしくはデバイス

を通して体表面に張った身体強化フィールドしかない。けれど龍平はそのフィールドが殆どない。それが多脚戦車の特殊装甲を豆腐よろしく斬り裂いた綾夏の一撃を受けたら。

(し、死ぬ！ それ間違いないく死ぬ!!)

死の予感に涙さえ浮かべて助けを求めるように十和子に視線を送る龍平は欠伸をしている女教師を見て頼れない事を悟った。

「早くPDWを発現させたら？」

綾夏が声をかけてきた。その真剣さに唾を飲み込んだ龍平は自分のデバイスを握り締めた。このままPDWを出さなければもしかしたら諦めてくれるかも。

「言っておくけどPDWを出さなくてもあと十秒経ったら行くからね？ それだけは覚えておいて。じゅう」

死へのカウントダウンが淡い期待を打ち破る。龍平は慌ててデバイスを起動し「アクティベーション！」と叫んだ。身体に流れるエクストラエナジーが瞬時に形を持つ。

保有しているエクストラエナジー量に比例するPDWの形状。龍平のそれはナイフ型で、つけられた銚めいは《蝗牙うが》。虫の牙うがなんてお似合いの名前だと自分でも思う。

現れたPDWの形状に龍平のエクストラエナジー量が少ない事を理解する綾夏だが気は抜かない。懲らしめてさっきの言葉を訂正させる。それだけはしないと気が済まない。

ナイフ型PDWを持って逃げ道を探す龍平に綾夏はゼロまで数え終わると「行くよ」と声をかけて突進した。まさに一息で二人の距離が詰まる。

仕留めた。そう思った綾夏は桜雷の大刀を構えて振り抜いた。

「うわあああああ!!」

悲鳴をあげる龍平は無様に転がってその一撃を避けた。思わず綾夏は「え?」と声を漏らす。今のは完全に仕留めたと思った。なのに避けられた。

床を這いずる姿にまさかと思いつつも一撃。立ち上がりかけていた龍平はそのままつんのめるようにその一撃も避ける。「なんで!」と言いつつ綾夏は次々と攻撃を繰り出した。突いて薙いで払って、だがその総てを龍平は避け続けた。

苛立ちを露わにする綾夏は攻撃が当たらない理由を必死で考えた。自分が無意識に力を抜いているからか、それとも調子が悪いのか。まさか龍平が中学生まで毎日空手道場に通い、避ける技術だけは武装者にも通用するまでになっていたとは思えない綾夏である。そう、龍平は避けるのだけは得意だった。中学生の時の初めての実技の時も、龍平は相手の攻撃を悲鳴をあげて這い回りながらも殆ど受けなかった。その代わり龍平の攻撃も一度として当たらなかつたが。

そんな避ける技術が命の危機に際してより一際高く発揮されていたのだ。それを知るはずもない綾夏はチョコマカと避け続ける龍平に悔しそうな顔で、

「ああ! つく! もう!! なんで、当たらないの! 動かないですよ!!」

「む、無茶苦茶言わないで! うわ、ひ! うわわ!! ひい!」

段々と本気になって鋭さを増してゆく綾夏の一撃一撃を龍平は本当に紙一重で避けきつ

た。これはこれで立派な技術といえるだろう。

そもそも武装者の戦いは相手と武器を合わせなければ始まらない。避ける技術も大事だが、いずれは攻撃しないとどうにもならない。しかし龍平は端から自分の武器を当てるつもりはなく、避ける気しかない。そんな奴の相手をするのは綾夏も初めてだった。

見事な避け技術の前に焦りと苛立ちと悔しさが溢れてくる綾夏は、日頃の冷静さも忘れて「避けないで！」と叫びながらPDWを振り回していった。それは明らか大振りだった。

普段の綾夏なら絶対に考えられない凡ミス。桜雷を振り抜いたあとの姿勢制御の失敗よろけた綾夏がつんのめつてくるのを避けようとした時、龍平の蝗牙の刃が彼女にほんの少し触れた。——キン、と小さく微かな刃鳴りがやけに大きく響いた。

致命傷になんて絶対になり得ない、触れるだけの一撃とも呼べない一撃。実際綾夏も龍平の蝗牙が触れたなんて最初気が付かなかつたくらいだ。

だが確かに薄皮一枚とはいえ掠り傷を負わせた。その瞬間、綾夏のデバイスが警告音を発して、手に握った《桜雷・二刀天元》がエクストラエナジーへと還元してしまった。

「……………え？」

漏れ出た声に含まれていたのは間違いなく驚きと戸惑いだった。

「なに……………なんで、え？」

綾夏はポケットのデバイスを取り出し再起動させもう一度PDWを発現させようとする。

しかしデバイスの画面に出るのは「エラー」の文字だけだった。

「どうして!? なんてこんな」

そこまで言っただけで思い至る。こうなった原因、それが負わされた掠り傷にあるという事を。焦る瞳で睨み付けた綾夏は龍平に詰め寄ると、

「どういう事! 何をしたの!! 私のデバイスに何をしたのッ!」

言われた所で分かるわけもない。生まれて初めてPDWを相手に当てる事が出来た。今の龍平に分かるのは精々それだけだ。言葉に詰まっていると綾夏は掴みかからんばかりに近づき襟首を掴んで強く揺すった。

「何をしたのか聞いているの! 答えて!!」

「ちよつと、ま、つて! わかんない! 分からないから!! ゲエッ!」

「分からないわけないでしょ! だつて君が私に傷をつけたらデバイスが」

綾夏がそう言っていると手に持ったデバイスが軽い音を鳴らしPDWを発現させた。

「ふえ?」と間拔けな声を出した綾夏が放心したような顔で桜雷を見つめ、それを掴もうとして龍平から手を離すとまたデバイスにはエラーの文字が出て桜雷はエクストラエナジーへと還元してゆく。

「な、な、ななな何でえ! どうなってるのお!!」

思わずそんな事を叫んでしまう綾夏の前で龍平はやっと自由になった首を押さえて盛大に咽せていた。別な意味で涙目の二人の前に十和子がやってきたのはそんな時だった。

腐っても教師、しかもデバイスの使用方法や修理を専門に教えている十和子に綾夏はさすがのような目を向けた。

「く、功刀先生！ 私のデバイス！ どうして、なんでえ!!」

「落ち着け日生。ちよつと貸してみろ」

言われるままにデバイスを渡す綾夏に十和子はロックを解除させプログラムの確認をしてみる。その顔はどんどん険しくなっていた。

見た事もないくらい真剣な十和子の顔に綾夏は青ざめながら話を聞こうとするが、

「日生がこうして……で、だから……こつちがこうで」

ブツブツ言う十和子に声をかける事が出来ない。そうしていると何かを思い付いたように十和子が顔を上げた。

「おい日生、お前はこう体勢を崩して鳴海の攻撃を受けたんだな？」

「こ、攻撃をつて……これは、あの」

あの程度の間拔けな掠り傷を攻撃とは認めたくないのだろう。言葉を濁す綾夏だが十和子の真剣な瞳に小さく首肯した。それを見るともう一度ブツブツと呟き、やがて目を瞑り黙考する十和子は、やけに長く感じる沈黙のあと、急に目を開けてデバイスを綾夏に持たせて突然龍平の手を取った。

いきなり何だろうと驚いている龍平だったが、その次に十和子が取った行動には思考さえ止まってしまった。それも無理ない事といえる。何故なら十和子は龍平の手を綾夏の乳



房の上に置いたのだから。制服越しとはいえ柔らか過ぎる感触が指に伝わってくる。

「……ひ……あ、あああ！ きゃあああああ!!」

「ちよつと待つて僕は悪くな、つへぶひ!!」

盛大に頬を叩かれた龍平だがその手は十和子によって掴まれたままで未だに綾夏の胸に置かれている。おまけに叩かれた衝撃で少し力を込めてしまったりもして。

「も、ももも揉んだ！ 揉んだあ!!」

耳まで真っ赤にして涙目になった綾夏は生まれて初めて自分の胸を触った記念すべき男の頬をもう一度叩こうとした。避けようのない一撃に悲鳴をあげる龍平だったが、その時綾夏のデバイスが起動音を鳴らす。真剣な目を向ける十和子の前で綾夏の桜雷は形を成してゆくが、龍平の手を綾夏の胸から離すとすぐに消えていった。

「……やっぱりな」

呟く十和子の言葉に綾夏は律儀に龍平の頬を叩いてから問いかけた。

「あの……えつと……今のは、どういう……なんで」

おずおずと声をかけてくる綾夏と頬を叩かれた衝撃で尻餅をついている龍平を見た十和子は白衣を翻すと「こい」と言つて歩き出した。戸惑う綾夏だったがこの状況でついて行かないという選択肢はなかった。あとを追うとまだ龍平が尻餅をついたままなので、

「何してるの！ 早く!!」

「僕も!?!」と声をあげる龍平だが綾夏の涙を浮かべたキツイ表情にそれ以上は何も言えず、

頬を摩すったまま立ち上がり二人のあとを追って歩き始めた。

十和子が二人を引き連れて向かった先は彼女に与えられた研究室だった。

武特学園の一部の教員は大学や研究機関の研究員からの引き抜きである。これはデバイスやPDWなどに専門的な知識が必要とされる為だ。研究員にしても最新の武装者の研究を進められるので互助関係として成り立っている。十和子もそんな内の一人だ。

研究員には個別の研究室が与えられ、そこは生徒や他の教員も立ち入りが制限されている。そこに十和子は龍平と綾夏を連れてきた。

緊張の面持ちで椅子に座る十和子を見つめる綾夏は説明を待つ焦れつたさに若干苛ついてさえる。十和子はもう一度、今度は龍平からもデバイスを預かると二人分のそれを自分のノートPCに繋ぎ、溜息をついた。

「先生！ いい加減話して下さい！ 私の桜雷が突然消えた理由……発現しなくなった理由分かったんですよね!!」

焦れた綾夏はついに直接的な問いを發した。そしてもう一度「先生！」と叫ぶように言う。すると十和子は二人に視線を送った。

「日生のPDWが発現しなくなった理由……簡単に言うとな、それは鳴海のせいだ」

やっぱりという視線を綾夏に向けられて、龍平は思い当たる節が全くないと首を左右に振る。その事を説明しようとするのだが、その前に十和子が、

「鳴海のせいだとは言ったが、鳴海がその事を分かっているとは言っていない。おい鳴海、お前自分のPDWで人に……武装者に攻撃を当てたのは今日が初めてだろ？」

正鶴を得た十和子の発言に龍平は視線を泳がせてコクリと頷いた。綾夏が驚いているのを感じて悔しさと恥ずかしさが込み上げてくる。けれど十和子はそんな龍平に納得がいったように頷いた。

「ま、そうだな。でなければ今頃鳴海がこんな所でサボり魔やつてる理由がないものな」
「先生、一人で納得していないでちゃんと説明をして下さい！」

綾夏の言葉によく言う決心がついたのか、十和子は頭を掻きながら語り始めた。

「いいか、日生。お前のPDWが発現しなくなったのはな、お前のエクストラエナジーが鳴海の支配下に置かれたからだ」

「は？」という声が二人分重なった。綾夏と龍平が同時に困惑の声を出したのだ。エナジーを支配なんて全く何を言っているのか分からない。そんな二人に十和子はどう言ったら分かりやすいかを考え、まるで幼児に高等数学を教えなければいけないような顔をして、
「えっとな、体内に流れるエクストラエナジーをデバイスを通して物質化する。これがPDWを発現させる理屈だ。分かるな？」

頷く二人に十和子は難しい顔のまま身を乗り出すようにして座り直し説明を続ける。

「だが、鳴海のPDWに攻撃を受けた事により、日生のエクストラエナジーは鳴海のエクストラエナジーの支配下に置かれた。つまり日生の中に流れるエクストラエナジーはもう

日生の物ではなく鳴海の物という事さ」

自分でも言いながら納得しているような十和子の言葉をまだよく理解出来ないでいる綾夏と龍平だった。これは結果だけ言った方が早いと判断した十和子は物凄く掻い摘まんで、「つまり、日生のPDWは鳴海に触れている間しか発現しないのさ。だって日生のエクストラエナジーはもう鳴海の物なんだからな」

「な！ ……え、あ、そんな……だってそんなの!!」

「ああそうだ。鳴海は希少なパーソナルスキルの所有者……その中でも多分飛び切りレアな対武装者用スキルを持つっているって事だな」

パーソナルスキルとは世界人口からみれば数の少ない武装者の中でも更に稀少な特殊能力者が有する特異能力の事である。例えばPDWの刀身から炎を発生させたり、他にも音波でシールドを作ったり、一時的とはいえ重力を操ったり出来る者もいる。

短い武装者の歴史の中でも数えられる程度しか発生しないパーソナルスキル所有者。その中でも対武装者用能力なんて記録されている限り前例がない。

驚く綾夏だが、それ以上に驚愕し言葉を失っているのは龍平だった。パーソナルスキルの特異の中の特異。それを自分が持っているなんてこうして説明されても信じられなかった。「信じられないって顔だな？ 正直私もだよ。デバイスとPDWの研究をして大抵の事は驚かなくなつたがこれは……いやはや」

本当に驚いているのか疑いたくなる気軽さでポケットから禁煙パイプを取り出し啜えよ

うとする十和子に綾夏が言った。

「ちよ、ちよっと待って下さい！ 鳴海君がパーソナルスキルを持っているのは分かりました！ でも、あの」

「ああ、解除方法か……すまん、そこまでは分からん。なにせパーソナルスキルなんて殆ど疑似科学の世界だぞ。研究もせずに分かるわけないだろ」

「そんな！」と悲鳴にも似た声をあげる綾夏は真つ青な顔で龍平に食って掛かった。

「ねえ！ 解除して!! 早く解除してよ!! 出来るんだよね？ だってこれ君の能力だもんね!?! 出来るよね?」

必死の剣幕に龍平は首を何度も左右に振ると、

「ご、ごめん……わかんない……ほんとに、ごめん」

つい素直に謝ってしまう。勝負をしようと思っかけたのも、勝手に躓いて龍平の攻撃を受けたのも全部綾夏のせいなのに。謝らなければいけない必死さが彼女にはあった。

膝から崩れ落ちそうな綾夏だったが、懸命にそれを耐えると混乱する頭で解決策を考えた。この状況を打破する方法をだ。

「けんきゆう……なら研究して！ 国の機関とか、大学とか！ 兎に角そういう特別な機関で研究すればすぐに!!」

ガリつと禁煙パイプを噛んだ十和子は苦虫を噛み潰したような顔で言う。

「そいつはやめた方がいい。対武装者用能力なんてどこにとつても鬼札だ。もし鳴海をど

こなりの研究施設に連れて行ったら一生そこで秘密のモルモット扱いだな。それならまだいいが……下手すりゃ各国で取り合いになって戦争の引き金になんて事にも」

世界のバランスが武装者を基盤に出来上がりつつある中で、それを総て覆す能力者なんて秘匿すべき研究材料か、さもなければ殺すべき対象だ。

十和子の言葉に今度は龍平が膝から崩れそうになった。やっと見つけた自分だけの能力。だがそのせいで死ぬなんて絶対に御免だ。青ざめていると十和子が綾夏に、

「もし鳴海がモルモットとして連れて行かれたら日生は一生そのままだぞ？ 分かるな？」

「……はい」

秘匿研究の成果が表に出る事はあり得ない。だから龍平の存在を公にすれば綾夏は一生能力使用停止状態のままだ。どうする事も出来ない自分に圧倒的な無力さを感じて綾夏は呆然とした顔をする。龍平は一度に色んな事が起こったせいで吐きそうだった。

沈黙が流れたあと、不意に綾夏が口を開いた。

「でも……このままなんて、そんな……このまま桜雷が出せないなんて……わたし」

泣きそうなのが声から分かった。しかし龍平には何も出来ない……と思っていたのだが。

「うん……まあ解決策がないわけじゃない」

もう一度綾夏と龍平の声が「え？」と重なった。視線が十和子へと向かう。

「せ、せんせい！ いまの……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。日生が鳴海に触れたままでもPDWを発現させる方法が……ないわけじゃない」

途端に綾夏の顔に満面の笑みが浮かぶ。目元には涙を溜めたままだが、満開の花のような晴れやかな笑顔だった。

「そういう事は早く言って下さい!! 私一生このままかと……それで! その方法って?」

「日生、お前鳴海とキスしろ」

「……は?」

時が止まったような感覚が龍平と綾夏に流れた。だがそれを無視して十和子は続ける。

「キスだよキス。と言っても普通のじゃダメだ。濃厚に舌を絡ませるディーブなやつをな」
「何言ってるんですかああああああああ!!」

叫びに十和子は顔を顰める。後ろで聞いていた龍平に関しては耳がキーンとなった。しかし綾夏はそんなのお構いなしに怒鳴り続けた。

「な、何ですかそれ! 意味分かんないですよ! どうして私が桜雷を発現させるのに鳴海君と……き、キスなんて! 意味分かんないッ!!」

真っ赤になって叫び続ける綾夏に十和子は「落ち着け」と言ってから、

「鳴海に触れていないと日生はPDWを出せない。ここまではいいな? つまりはどこでもいいから鳴海に触れていればいいわけだ。ここまで言えば分かるだろ?」

「……だ、唾液……」

額く十和子に綾夏は瞳を潤ませる。その理屈は何となく分かった。分かったが受け入れられるわけではない。PDWを発現させる為とはいえ唾液を飲むようなキスをしなければならぬなんて、そんなの絶対に無理だと感じる。しかも仮に成功したとして、そうすれば今度は何かにつけPDWを出す時には龍平とキスをしなければいけないという事で。

「む、無理です！ 絶対に無理です!! 他に何か……」

「血液を輸血するって手もあるが……鳴海、お前血液型は？」

「……B、です」

「日生は？」

「……A」

「無理だな……臓器移植って手もあるが、現実的じゃない。一番簡単で確実なのが」

そこまで言われてようやく解決方法がそれしかないと思った。それでも心の中で出来ないと嘆く部分を無理矢理ねじ伏せた綾夏は。

「わかり……ました」

「ええええええ!! い、いやちよ……日生さん!!」

まさかOKを出すとは思っていなかった龍平である。あの学園最強のマドンナが自分なんかとどうしたってキスなんかするはずないと十和子の説明を聞きながら思っていたのだ。

しかし決意した様子で綾夏は龍平を泣きそうな目で見つめると、

「しょうがないでしょ！ それしかないんだから……そ、そりゃ、鳴海君は……私なんかとキス……したくないだろうけど」

思わず「そんな事ない！」と言いかけた口を龍平は噤んだ。綾夏とキスしたくないなんて嘘でも言えない。しかしさつきあれだけ悪口を言った相手にキスしたいとも言えなかった。

何も言葉を返してこない龍平に綾夏は今にも泣きそうになりながら言葉を絞り出す。

「……キス、して」

あの日生綾夏にキスをしてなんて言われる日がくるなんて。明日辺り死ぬんじゃないかなろうかと思っていると十和子が、

「おい鳴海、これは実験だ。人工呼吸みたいなものだ。してやれって」

この無責任教師！ と叫びたい気持ちを抑えて龍平は綾夏を見た。彼女は十和子の言葉に「そうよ、人工呼吸よ」と繰り返して自分を納得させようとしている。

女の子側がここまでキスに乗り気なのに男の自分というのも何だか色々間違っている気がして、納得はしないまま龍平は綾夏に問いかけた。

「……いい、いいの？」

「……さつきから、してって言うてるよ」

「……じゃあ……お願いします」

緊張のあまり変な台詞を発しながら龍平は綾夏に近づいた。

ついで一時間ほど前に初めて言葉を交わして、しかもそれが言い合いで、おまけに流れで決闘までする事になった相手とキスをする事になっている。色々あり過ぎて緊張に何も考えられない龍平が、唇が触れる時に考えたのは「口臭大丈夫かな？」という事だった。

そんな事を思っている間に唇同士が触れる。ビクつく綾夏に離れようとする龍平だったが、すると向こうから唇を押し付けてくる。柔らかさといい香りに思わず口が開いた。

「舌入れる日生、んで唾液を貪るように飲め」

少し黙ってる！と睨んでしまう龍平だが、それも綾夏の舌が入ってくるまでだった。滑った感触が舌に触れ、唾内を舐め回してくる。生きていて初めての感触だった。

「へる……れちよ、るちゅ……ちゅぶ、ぢゅ……れぢゅ」

卑猥な音が鳴る。しかもそれは綾夏が龍平の唾内を舐め回す音だ。脳天までが興奮と緊張と舌への刺激に痺れてくる。このままずっとしていたい。そんな初めてのキスはしかし呆気なく綾夏が口を離しておしまいだった。口から舌が出て追いかけてしまうことになる。

慌てて舌を唾内に戻して口を閉じ、クラクラする頭を落ち着けようとしたが、興奮はいつまで経っても冷めない。自分があの綾夏ととんでもなくディープなキスをしたなんて。

最高の夢を見ている気分でもってしまおうとしよう。龍平の前で綾夏は浮かんだ涙を拭う。そこに十和子が「PDWを出してみろ」と声をかけた。何も言わず頷いてデバイスを操作する綾夏の左右にエクストラエナジーが物質化され二振りの刀が発現した。

ホッとした顔でそれを掴む綾夏だが、柄の感触を確かめている最中にまた。

「え、あ！　ちよ、な、なんで!!　消えないで!　消えちゃダメ!　あ!!」

《桜雷・二刀天元》は再び光の粒子となって消えていった。手の中から消えた感触を掴み取ろうと両拳を握る綾夏は十和子に、

「どうしてですか!?　私ちゃんと……ちゃんとしたのに!!」

「唾液じゃその程度か、やっぱりな。もっと濃い物をはつきり残しておかないとダメ……か」

「もっと……って、あ……」

自分の至った考えに呆然とする綾夏は十和子を見つめたままの状態で固まった。もっと濃い物をはつきり。それはつまり。

「セックスしろって……ことですか?」

「しろとは言っていないさ。ただ、今の所それしかないって言っているだけだ」

ここにきてもまだ気楽な物言いの十和子に綾夏は小さく震えた。話の内容をようやく理解出来た龍平は「え!!」と叫んだあと女教師を見た。

「せ、先生!　いや、それはダメでしょ!!　教師が生徒に……」

「あのな、だからしろなんて言っていないだろ。解決策はそれしかないって言っているだけだよ。するもしないもお前ら二人の決断次第。私が決める事じゃない」

それは、と言いかけてやめ、龍平は綾夏を見た。その身体はまだ震えている。無理もない。女の子にとってそれがどれだけ大変な事なのか、女性経験も女の子と付き合った事さ

えない龍平にだって分かる……つもりだ。だから震える綾夏に代わって十和子に問いかける。

「何とかならないんですか？ あ、あの僕、検査とか……あと、PDWのチェックとか受けます。だから、その……先生が」

「あまり買いかぶるなつて。私に出来る事なんてたかが知れている。それでもまあ、可愛い生徒の為だ。努力はするが……私個人の力じゃ根本的な解決策を見つけないでどれだけかかるかは……正直分からん」

「わ、分からんて！ そんな」

無責任、とは言えない。無責任なのは能力を持っていながら使いこなせない龍平と、そんな龍平に喧嘩を売って勝手にこんな状態に陥った綾夏なのだから。あくまで十和子は現状どうなっているかを説明してくれたに過ぎず、そんな相手に無責任と言うのはお門違いだ。

唇を噛んだ龍平はどうすればいいかを必死で考えた。しかしいい考えなんて浮かんでくるとは思えない。ごめんといいかけると、綾夏が顔を上げ瞳を向けた。どこか諦めたような、それでいて諦めきれないような、そんな目をしている。その目を龍平はよく知っている。今日までの自分の目とそっくりだった。

綾夏は口をパクパクさせて何か言葉を絞り出そうとして、でも出てこない言葉を一度飲み込んでから十和子を見つめた。

「せん、せい……わたし、します」

聞いた言葉が信じられなくてポカンと口を開ける龍平に比べて十和子は冷静だった。

「そっか、でも私に言っても仕方ないだろ。日生がすると決めても鳴海が同意してくれるかどうかだろ？」

「そう、ですよね……何してるんだろ……ごめんね、鳴海君……あのね……」

「ダメだよ！ ダメだって!! そんなの絶対！ こんな事でスルとか……そんな」

たかがPDWを出せないだけで好きでもない相手とセックスする。それは絶対ダメな気がして、だから龍平はそう言った。すると綾夏が必死な顔で、

「こんなじゃない！ こんな、じゃない……もん……桜雷が……もう、出せないなんて……だめ……そんなの、絶対ダメ……ダメだもん!!」

子供みたいな声を出す綾夏に龍平は悟った。自分と彼女ではPDWの重要さがまるで違うのだと。それはそうだろう。片や日本でもトップクラスの武装者、それに比べて自分は。

PDWなんてなければいいと考え続けた龍平に綾夏の考えは多分一生分かららない。

「わた……し、には……桜雷しかないの……あれしか！ 武装者である事しか!! わたし、には……ないの」

ハッキリと「そんな事ない」と言えるほど、龍平は綾夏を知らない。軽々しくそう言うて綾夏を受け止める事も出来ない。

(……元はと言えば、僕の……せいだよな)

ここまで武装者である事に縋てをにかけている相手に軽々しく才能だ何だと言って、そして上手くやられてやる事も出来ない。そんな自分のせいだと思った龍平は、

「……日生さんが……イヤじゃないなら……いい、よ」

「……ありがとう」

お礼をされるのも変な気はしたが、それでも「うん」と言葉を返した龍平は綾夏を抱く決意を改めてするのだった。

ssss

水が流れている音がする。たったそれだけでこんなに緊張する事を龍平は知らなかった。たった今シャワーを浴びたばかりなのにもう汗が出てきて、近くにあったタオルでゴシゴシと手汗を拭ってしまう。シャツとボクサーパンツだけの姿で立ったり座ったりしながら最終的にはベッドに腰掛けた龍平は思い立ち、急いでベッドシーツを取り替え始めた。

龍平が今いるのは自宅だった。ワンルームタイプのマンションで龍平はここで一人暮らしをしている。両親は仕事で他県に赴任していて、その県には武装者の為の学校がなく、子供の将来を思った二人は龍平に一人暮らしさせて武特学園に通わせているのだ。

綾夏とセックスをすると決めたあと、いつするかという話になって、綾夏は「明日の能力測定までには」と言っていた。なら明日の朝早くと提案した龍平だったが、いきなりは無理だから今夜慣らして、という事になったのだ。十和子も持続時間を確かめる為にそれ

がいいと言っていた。そしてどこでスルかという話になると綾夏の家は実家で無理だしラ
ブホテルは嫌がった。十和子の部屋を借りようかと言ったら、

「生徒を部屋でセックスさせたなんてバレたらクビだぞ馬鹿もん」

と言われ、結局は龍平の部屋でという事になった。男の子の部屋に行くのが初めての綾
夏は、いきなりセックス目的だと思ふと心が折れそうになったが必死に堪えていた。

学園を揃って出る時に十和子に言われたのは「ゴムはするな」「いきなり色々試すな」
だった。本当に教師かと言いたくなる。

そうして誰にも見られないように龍平の家へと向かった二人は、部屋に入ると緊張した
ままだちらが先にシャワーを浴びるか相談した。あとがいいと言う綾夏に従う龍平は先に
浴びて、今こうして緊張しながらシーツを替えていた。

このあとは何を用意すればいいのか分からなくて、一瞬検索エンジンで「はじめてセ
ックス 準備する物」と調べそうになる。だがそうこうしている間に綾夏がシャワールー
ムから出てきた。お風呂上がりの仄かに赤く染まった身体に大きめのバスタオルだけを巻
いているその色つばい姿に龍平は見惚れてしまう。

「……あんまり……見ないで」

「ど、ごめん！」

慌てて視線を逸らすが、思えばこれから見るどころではない事をするのだ。しかしそれ
とこれとは別のような気もするし。どうしていいのかわからなくて、挙動不審になる龍平

の隣に綾夏は意を決したように腰掛けた。そのまま二人して黙ってしまう。

お互いどちらのせいであろうなつか、何でこんな事にかは暗黙の了解的に言わない。ただ黙って腰掛けている。何だかこのまま朝になりそうな気もしてくると、

「……じゃあ、一回……して、おこう、か」

「え……あ、ああ、うん」

綾夏の言葉に素直に頷いている自分が何だかおかしい龍平だった。思えばおかしい事ばかりだ。たった数時間前まで龍平は綾夏の映像を観て拗ねていた。ああはなれないと絶対の高みにいる存在として綾夏を厭っていた。なのにそんな相手と口喧嘩して決闘して、それだけでも充分過ぎるほど驚くべき事なのに、気付けばセックスする事になっているなんて。

本来なら龍平にとって今日一番気にかけるべき案件は自分が世にも稀な特異能力者——パーソナルスキルの持ち主だという事だろう。だがその頭はこれから綾夏とする事だけで占められている。思春期の青少年にとっては世界の命運や自分の人生の今後よりも初めてのセックスの方が大事なのだ。

そんな龍平の顔を見た綾夏はベッドに横になった。タオルに胸元から股間までが隠れ、あとは肌色が見えている。美しい身体をベッドに横たえる綾夏の姿に本当に触れていいのか躊躇ちゅうちよしてしまう。本当は何か壮大なドッキリでも仕掛けられていて、触れた途端に警察がきて逮捕されるとかじゃないのかとさえ思えてくる。それならいっそのまま美しい綾

夏が自分のベッドに寝ている姿を見続けるのもいいかも……なんて馬鹿な事を考えていると、

「……はやく、して……恥ずかしい、よ」

「ご、ごめん。それじゃ……」

いただきますと言いかけた龍平は自分の頬を叩くとベッドに乗って綾夏の傍に近寄った。龍平が近づいてくる感覚に綾夏はビクッと身を震わせた。

「あ、あのさ……やっぱり」

「だ……大丈夫、だから……へいき……だから」

「でも……」

「平気なの！ だから……早くして」

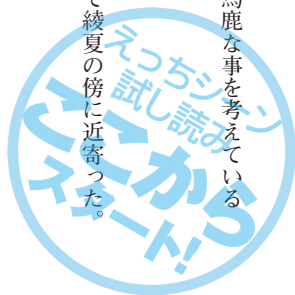
一刻も早くこの時間が過ぎ去る事を願っているような声だった。それはそうだろう、好きでもない相手とのセックスなんてそんなものだ。その事に納得しながらも何故だか少し胸をモヤモヤさせて、龍平は綾夏の上に覆い被さった。甘い匂いが鼻孔を刺激する。

自分で購入していつも使っているボディソープの香りのはずなのに、何故か綾夏からはその何倍もいい香りがする。それに少し触れた身体の柔らかさに驚いてしまう。

（お、女の子って……こんな、柔らかいんだ）

普通に驚きながらゆっくりとバスタオルを外そうとする龍平に綾夏が、

「で、電気……消して……お願い」



「え？ うん……あ、で、でもさ……僕、その……は、はじめてで、電気消したら、あの」
色々分からなくて失敗するかも。羞恥に耳まで真っ赤にしなから素直に告白する龍平に綾夏は常夜灯なと言った。それならギリギリ見えるだろう。頷き慌てて蛍光灯のリモコンを操作して常夜灯にした龍平は薄明かりの下、改めて綾夏のバスタオルを剥いだ。

オレンジ色の微かな光の下で綾夏の裸体が艶めかしく揺れている。均整のとれたボディにはお椀型の乳房と小さな乳首、そして引き締まった腹部の下には微かな茂みがあった。エロ本やエロ動画で見た女性の裸の何倍も美しい。素直にそう感じる龍平は生唾を飲み込むと声をかけるのも忘れて乳房を触ってしまった。

「きゃ！ あ……んん！ あ、だ、だめ……ああ」

「ごめ……あ、あの」

手を引っ込めた龍平に綾夏は自分の胸を隠すように手を添える。

「……い、いきなりは……怖いかも……声、かけて」

「うん……ほんとごめん……き、綺麗過ぎて……」

「え？」

「あ、いや……何でもない……む、むね、さわる……よ？」

「……うん」

返ってきた声に恐る恐るもう一度胸に手を置いた龍平は、その二つの膨らみをゆっくり揉みしだいた。脂肪の塊は指の中でぷにゅぷにゅと揺れ動く。柔らかい。こんな感触今迄

味わった事がない。自分が女性の胸を揉んでいるなんて信じられないが、指から伝わるリアルな感触が段々とその事に現実味を持たせた。つい夢中になって揉み込んでいると、夏の呼吸が速くなる。そしてその合間に息を呑むような音が混ざり始めた。

「あ……は、う……ん……つく、あ、んん！ あ……ああ、ふあ」

何かに耐えているような声は色っぽくて、聞いているだけで龍平の股間には血が集まってゆく。感じているのだろうか？ それを知りたくてもっと指の動きを激しくさせた。

「んああ！ あ、うんん！！ や、あ！ やあ、あつく……だめ、ん！ だ、あ、んああ！！」

感じている。あの綾夏が自分の指で感じている。その事に龍平の頭は真っ白になった。学園のマドンナ、最強の少女、触れる事さえ出来なかった存在が、今この指先で感じているだなんて。「日生さん」と呟きながら指を動かしていた龍平は、その動きの中で乳首に触れてしまう。綾夏の乳首はピン！ と尖っていた。

「きゃあん！ あ、んん！！ ま、って、それ……は、んん！ だ、めええ！！」

硬い場所にもう一度、もう一回と触れていると綾夏の反応は際限なく高まってゆく。初めて乳首への刺激に心よりも身体が反応してしまっている。

その勃起した乳首を乳輪から優しく撫で、尖った先端を指先でコリコリと弄る龍平は興奮に息を荒くした。もう綾夏の「だめ」と言う声も聞こえないくらいだ。舐めたい。これを舐めたい。吸い込んで味を確かめ、しゃぶり回したい。雄の本能がそう訴えてくる。



「ひなせ、さん……ちくび、舐めていい？ 舐めるよ？」

「ふえ？ あ、そ、んな、だめ……いま、だめ、すっちゃ……んあああ！！」

返事も聞かないで舐め始めた龍平はまるで赤ん坊のようにちゅばちゅばと乳首を舐め吸った。技も何もない単純な行為だがそれでも綾夏には充分過ぎる刺激で、

「あ、んああ！！ や、あ、あ！ ああん！ あああん！ ひ、う、んんい！！ うううう！！」

自分でも聞いた事のない悶え声に綾夏は驚きつつ胸からの快楽にシーツを握り締めた。

好きでもない相手にされてどう感じるのか不安だったが、そんなの杞憂だった。間違はなく気持ちいい。腰が浮いてしまうくらいだ。そんな自分が嫌で首を振りながら快楽を少しでも消そうとする綾夏だが、龍平の舌が段々と性的な動きを見せると声は益々大きくなつた。

舌先で全体を転がし、舌裏で先端を舐め、唾液で充分濡らしてから軽く吸い込む。本能的にそんな舐め方をする龍平は乳首が口の中で硬さを増してゆくのを感じた。

夢中になつている龍平に綾夏は色んな感情が耐えきれないほどになつて、

「ま、つて……んんあ！ も、もう……や、ああ、んん！ おね、がい……もう、いれて」挿入のおねだりなんて死ぬほど恥ずかしかったが、これ以上乳首を責められて喘ぎ続けるのは無理だった。「いれて」という言葉を少し経って理解した龍平は驚いたように綾夏を見つめてから、

「も、もういいの？ ……だい、じょうぶ？」

あそこが濡れないと入れられないという知識くらいはあった。だから問いかける龍平に綾夏は唇を噛んで小さく頷いた。

綾夏の膣内に肉棒を挿入出来る。その事に現実感が途端に消え失せるが、肉棒だけは痛いくらいに勃起していた。そもそも綾夏の上に跨がった段階で勃起してはいたが、今では自分でも信じられないほど硬く膨れている。自慰行為の時でもここまで硬くなった事は無い。これが女性を貫く為の硬さかと思えてくる。

龍平は急いでシャツを脱ぎパンツを下ろした。中からはバネ仕掛けのオモチャのように肉棒が飛び出してきた。龍平のそれはまだ使用経験がない事がハッキリ分かる色と形をしている。だが若さがそこに凶暴さを与えていて、血管は太く血が通い、裏筋を見せて反り返る亀頭は臍に着きそうなくらいだ。普段は包皮がまだ少し雁首にかかっているが、本気で勃起している今は完全にズリ下がっている。そんな雁首が完全に露出した亀頭を膨らませるペニスを薄闇の中で見た綾夏は悲鳴を堪えるのに必死だった。

初めて見る雄の生殖器。グロテスクでSF映画のクリーチャーみたいに見える。あんなのが自分の中に入るのかと不安にさえなる。思わず太腿をキュッと閉じる綾夏に龍平は、

「あの、日生さん……えっと」

「ま、まって……待ってよ……」

深呼吸する綾夏は龍平の肉棒をジッと見ながらゆっくり脚を広げていった。ペニスを見られている感覚が照れくさくて、龍平は逆に視線を綾夏の股間に向けてしまう。

互いに相手の秘部を見つめている二人は、ゆっくりと挿入へと準備を始めた。

広がる綾夏の脚。その間に腰を進める龍平。距離が縮まり熱を帯びた部分が触れそうになる。その前に太腿同士が軽く触れた時点で二人とも茹蛸のような顔になっていた。

「も、もうちよつと……ひ、ひろげて」

「あ、あう……うう、わ、わざと……じゃないよね？」

「え？ あ、あの、なにが？」

わざと恥ずかしい格好をさせているのではないかと問いかけた綾夏は、龍平の様子にそうではないと察すると「何でもない」と言つて恥ずかしさを堪え脚を限界まで広げた。

がに股で男を迎え入れる体勢になった綾夏に龍平は心臓のドキドキが限界を超え倒れそうになる。微かな光の中ではよく見えないが、それでも僅かな茂みの中にあるこんもり膨らんだ恥骨と、その下にある肉の割れ目が分かった。

初めて見る雌器官。おま○こは純粹に卑猥でそして美しいと思つた。無修正の映像で見た時はもつとグロテスクだと感じたが生で見るとは全然違う。それとも綾夏のが特別美しいのだろうか？ 是非明かりの下でじっくり見たいと思つたが、それは絶対嫌がるだろう。なので我慢して挿入する事に意識を集中させる。脚を広げたせいで緩く開く陰唇の隙間に艶めかしい粘膜器官が見えるが、ハッキリ言つてどこがどれだかさっぱり分からない。

戸惑うようにジッと見つめる龍平に綾夏は泣きそうな顔で、

「何でそんな、み、見ないでよ！ もう、やだあ……ううう」

「ご、ごめ……あ、あので、でも……ごめん、分かんない……これ、どこに挿入いれるの？」
「えええ!! あ、あの、え……そんな、こと……え、うう」

一応自分の穴の位置くらい把握しているがそれを教えて「ここ」なんて出来るはずがない。けれどしないと話が進まない。龍平が女性と経験がない事をこの時点で完全に理解した綾夏は、誰とでもいいからしておいてよと心で愚痴りながら上体をゆっくり起こした。脚はがに股のまま腰の前に座る龍平とキスでもしそうなくらい顔を近づけると、泣きそうな表情で恐る恐る肉棒に手を添えて、

「こ……ここ、に……挿入れば、いいと……お、思う」

綾夏が自分のペニスを触っている。その事実には走りか漏れ出たついでに本汁も出そうになる龍平だったが、何とかそれに耐えると「こ、ここ？」と言って腰を進めた。

亀頭先に肉の感触が触れると龍平はそのまま腰をグツと進めた。すると柔肉が亀頭全体を包んでゆく。驚きながらも少し腰を押し込むとにゅぶぶぶ……っと入り込んでゆく。

「う、わ……わ、わ……あ、う、うわ!」

間拔けな声を出す龍平は亀頭が今迄感じた事もない感触に包まれるのを感じて腰を震わせた。温かくて柔らかくて、濡れが少ないので肉の感触を強く感じる。これが女性の――綾夏の膣なのかと感動さえしてしまふ。そんな挿入に綾夏は痛みを感じて顔を顰めた。破瓜の痛みは身体の内側が切られているようで、

「い、つくう……ううう! ん、つぐ、い、いいあ……んあ!」

「い、いや！ その、し、したくないわけじゃない!! むしろしたい! 日生さんとセックス出来るなんて夢みたいだし!!」

涙目で「ふえ?」と首を傾げた綾夏は言葉の意味を理解して潤んだ顔を赤くする。その反応に自分が何を言ったか理解した龍平も赤くなった。

「いや、違くて! ……じゃなくて、違わなくて! その、セックス出来るのは嬉しいんだけど、その、なんか利用されるだけつてのが嫌だったつて言うか……えっと」

「あ、ううう、う、うん、そ、そつか……うん……うん?」

何を言っているのか言われているのか分からなくなった二人は互いに混乱して真っ赤になつていたが、やがて龍平が意を決したように、

「あの、だから……日生さんと……日生さんとセックスしたい。させて下さい!」

「……え……あ、ああ、え! あ、あの、えっと、あの、ね、今の話でその、無理矢理そういう気分にはさせちゃつたなら」

「その気持ちもあるけど……でも、あの……日生さんとしては本当。出来るのが夢みたいって言うのも……本当」

急に素直になられて対応に困る綾夏は涙を止めて俯いた。一世一代の自己露呈をしたはずなのに、その気持ちも消えてしまつている。生まれて初めて男性に「セックスさせて」と言われたのだから無理もないだろう。

真面目に見つめてくる龍平に口ごもるように綾夏は小さく呟く。

「……あ、ああいう、お願い……聞いてあげられないけど……それでも、いいの？」

ああいうのとは多分フェラチオとか色々だろう。自分が言っていた事を思い出して綾夏以上に顔を赤くする龍平は、

「だからあれは！ 日生さんを諦めさせたくて意地悪しただけで……全然いいよ」

「……それじゃ、お願い……します」

ぺこりと頭を下げてお願いしてくる綾夏が可愛くて、そして素直にこの美しい少女を抱けるのだと思うと嬉しくて、若いペニスはまだ大きくなり始めてしまうのだった。

床に直接じゃ冷たいだろうと床運動用のマットを広げて、そこに綾夏を寝かせる。

運動用マットに寝転ぶ強化服姿の美少女というのは何だか倒錯的な感じがしてエロい。脱がせようか迷った龍平だが、このままの方が興奮出来ると感じた。

既に昼休みは終わっているので急がないと綾夏をサボらせる事になってしまう。だからなるべく興奮を高めるような状況にしないとイケないと思ったのだ。

てつきり脱がせてくるものだと思っていた綾夏はその事に「え？」と小さく驚いた。

「あ、あの……鳴海くん……え、あ、えっと」

「あの、さ……こ、このままの方が、興奮するから……このままで」

「えええ!! そ、そんな！ またそうやって……いじわる」

「違うよ！ 今度のは違う!! 意地悪で言ってるわけじゃなくて！ もう時間もないし！

だからすぐにイカないとダメで、それで、だから……強化服着ている日生さんすつごくエロいから！ これでエッチしたらすぐに……その」

龍平のとんでもない告白に綾夏は涙目で「うう」と唸りながら強化服を着た身体を手で隠そうとした。この強化服が扇情的な事は理解していたが、まさか面と向かってエロくて興奮すると言われるなんて思いもしなかった。

けれど龍平が言わんとしている事も分かるし、出来ればすぐに射精して貰いたいとも思う。だから不承不承頷こうとして、ふと疑問が湧いた。

「で、でも……これ着たままつて……どうやって……するの？」

「それはさ……ほら、あの……股間の」

龍平の提案を聞いた綾夏は意味を瞬時に理解して涙目になった。そして叱るように言う。「な、何考えてるの鳴海くんは！ どうしてそういう下品なこと思い付くの!!」

下品な事と言われても、これは強化服を見れば誰でも思い付く事で、実際エロ動画なんかでもそういうのが多数UPされていたりする。

その方法とは実に簡単で、このスーツは着脱が結構困難な為にトイレ用の仕掛けが施してあるのだが、その部分を開き股間だけ出してセックスをするのだ。

ネット界限では「その為に作られたギミックだ」とさえ言われている股間部分の保護パーツを龍平が見ている事に気付いた綾夏は太腿を固く閉じ真っ赤になって潤んだ瞳を向けた。そのまま二人の間には少しの沈黙が流れたが、やがてゆつくりと綾夏の足に籠もつて

いた力が緩んでいく。どうやらそれが最善の策だと認めたらしい。

許可が出たのだと判断して、龍平は股間の保護ブーツに手を触れた。ファウルカップみたいなそれは男子と女子で形状は違うが、開閉方法は同じだろうとギミックを操作した。

プシュッと空気の入るような音がして、股間部分が展開してゆく。そして綾夏のおま〇ことお尻がスーツから晒される。

「や……う、うう、もうやだあ……ばかあ」

誰に対して言った台詞かも分からない言葉を吐いて綾夏は顔を手で覆い隠した。龍平の顔をまともに見る事さえ出来ない。それに対し龍平は、前回の薄明かりの中ではなく体育倉庫の採光用窓から入った日の光に照らし出された綾夏の陰部に見入っている。

こんもりした恥丘に僅かに陰毛が生え、そこから始まる割れ目からピンクの粘膜を覗かせるおま〇こ。淡い色をした微かな陰ピラがエロさを増大させる。

映像や画像で見るとは違う生の質感、そして匂いが龍平の獣欲を刺激して止まらない。「うわ……うわあ……すごい」

素の感想を漏らすと綾夏が足をバタつかせた。

「変な事言わないでえ！ 鳴海くんの変態！ 変態なこと言うのダメだよお」

「ごめん」と謝りながら次にどうしようか考えた龍平は思い立っておま〇こに口を近づけた。それを感じた綾夏は「ふえ？」と言ったあと、引き攣った顔で首を左右に振り自分の股間に近づいてくる頭を押し返した。

「だめ！ ぜったいダメえ!! そんなとこ舐めちゃダメだよ！ な、何考えてるのお」

「え？ でも……普通はするみたいだし。それに濡らさないと……挿入はらないから」

「ふ、普通なんて知らないよお……それに、濡らすのは……また前みたいに」

そう言っただけ綾夏は自分の強化服の乳房の脇部分にあるボタンを押した。するとプシュッと空気の抜けるような音がして胸部分のパーツが開いてゆく。

元々は心臓マッサージなどを行う為の仕掛けなのだが、ネット界限では「着たままおっぱい責めをする為のギミック」と呼ばれていた。

勿論そんな事は知らない綾夏だが、前のように胸を揉んで濡らして貰う為にそれを行ったのだ。乳房をまたしつこく責められるのは勿論恥ずかしいが、それでも股間を舐められるよりはマシだ。

と思ったのだが、時既に遅く、綾夏が自分から胸を露出する頃には龍平の口はおま〇こへと押し付けられていた。

全く躊躇せずに綾夏のピンク色の秘裂へ口をつける龍平は本音を言えば舐めたくて仕方なかったのだ。気を抜いていた綾夏はその動きに対応が遅れた。

「あ！ だ、だめ！ 胸、でいいか……あ、あ！ やう！ あ、ああああ!! ん、なんだ……めええ！ 舌、動かしちゃ……ああああ!!」

指責めの経験さえないのにいきなりクンニを受けて綾夏はその快楽に仰け反ってしまった。特殊素材の強化服が激しい動きにギチギチと音を立てた。その音が龍平には綾夏が気持ち



よさに身体を反応させている証拠に思えて、堪らず舌の動きを苛烈にしてゆく。

自分が日生綾夏のおま〇こを舐めているなんて誰に言っても信じて貰えない妄想じみた出来事が実際にこうして起きている事に頭がぼうつとなる。その逆上せたような感覚には間違はなくこの陰部の味も関係あると思った。だってこんな淫靡な味を龍平は他に知らない。肌のしよっぱさが濃く、そこに汗の香りが強く混ざって、何より少しだけおしっこの感じもするが、それが全然イヤじゃない。いつまでだって舐めていられる気がした。

ジョリジョリとした感触の陰毛を舌で掻き分けて中の陰核を擦り舐め、そこからゆつくり粘膜部分を伝って膣口へ。蜜を誘うように肉口を舐め回すと綾夏の反応は大きくなった。「ひゃあ！ あ、あああんん！ んん、な、るみ……くんんん！ ん、んんああ！ 汚いよお……汚い、から……だめ、ええええ！ え、うう、ううう！」

午前の授業で汗蒸れしているし、トイレにだつて行つた。ちゃんと拭いてはいるがそういう問題じゃない。絶対に汚いと感じるその部分を舐められている事が信じられなくて、そして気持ちよすぎて、綾夏は龍平の頭を押さえながらいつしか腰を淫らにくねらせていた。

それはまるでもつとしてくれとねだっているような淫らな動きで、龍平が応えるように舌を動かすと綾夏の脚はビクンと反応しながらどんどん卑猥に広がってゆく。

全身を覆うスーツを着て、股間を晒し、そこを舐められる事への羞恥と快楽と背徳が頭の先まで痺れさせる。そんな綾夏の陰核を龍平は集中的に責めた。舐めれば舐めるほど硬

さを増して、しかも一番感じさせる事が出来るそこを夢中になって刺激する。

包皮越しに舐め、先端を擦り、全体を吸い込む。チュッパチュッパ音を立てると、微かに震える綾夏のお尻が可愛らしい。だから夢中になっていると、

「んん！ ひ、あ、あああ！ んんああ!! なる……み、くん！ ん、んん！ ひゃあううう！ 吸っちゃ、だめえ……だめ、だよお!! あ、あああ！」

膣口から蜜がコポッと溢れ零れる。おま○こはもう唾液と愛液でドロドロになっていた。抑えきれないほどの快楽が綾夏の身体中を走る頃、龍平もどうしようもなく快楽が欲しくなってくる。この蜜を溢しまくる濡れ火照った気持ちのよい淫肉の中に猛った肉棒を押し込みたくなつたのだ。堪えきれない雄の欲求がパンツに先走りを滲ませると、龍平は口を離して抱きたいと訴えようとした。するとそれより先に綾夏が切なげな声で。

「……おね、がい……もう、いれて……もう、いれてよお」

愛撫される事への羞恥と、これ以上されたらどうなるか分からないという恐れがそう言わせたのだろう。しかしその想いの中に疼く膣内に龍平の肉棒が欲しいという気持ちがあるでないかと言えばそれは嘘だ。激しいクンニ責めにすっかりヒクつきっぱなしの雌肉を感じる綾夏は切なげに潤んだ顔で龍平を求めた。

そうしたかったというように頷いた龍平は急いで制服のズボンを脱ぎ、ボクサーパンツを下ろした。中からは若いペニスガビン！ と飛び出してくる。

日の光の下で見る雄器官を見て綾夏は息を飲んだ。薄闇の中で見た時よりも数倍凶悪さ

が増しているように思える。まだ皮膚とそんなに変わらない色をした竿部分に比べて亀頭周辺の膨れあがった赤黒さは強烈で、間違ひなく女を貫く為の形をしていた。

戸惑う綾夏に気付かず、龍平はこの前と同じように彼女の細い脚を優しく掴んだ。

「きゃ！ あ、ちよ、まって……ああ」

止める言葉に龍平が気付く頃には綾夏の脚は完全に広げられてしまっていた。寝転んだ体勢でM字に広げられた脚は中央部の淫肉を余すところなく見せている。

すっかり唾液と愛液で濡れた陰毛と小陰唇。そして吸いしゃぶられて硬くなったクリトリスに肉をヒクつかせた腔口。総てが男の興奮を刺激した。

挿入されるのだと感じて緊張する綾夏に対し龍平はさつき舐めたこの穴に押し込めばいいんだよなとそればかり考えていた。前回は綾夏に半分やらせてしまったが今日は自分と考えているのだ。興奮で頭がよく回らないが、ここでいいだろうと見当をつけて、

「い、いくね……挿入れる……よ？」

声をかけてから臍に着くくらい反り返ったペニスを指で押さえて粘膜肉の穴に押し付ける。あとは前回の要領で腰を入れると、にゅぶぶぶ……と腔肉に亀頭が飲み込まれてゆく。密着し締め付けてくる濡れた腔肉の感触が肉棒全体を覆って奥へと誘おうとしてくる。その気持ちよさに龍平は「んあ」と息を漏らして綾夏の太腿に手を置き腰を進めた。

奥に行けば行くほど全体に絡んでくる肉の圧迫感が増して快楽が段違いになった。けれど挿入されている綾夏にはまだ若干痛みがあるようで、

「んん！ い、い……ああつく！ ふ、ううう！ ん！！ んんあッ！」

傷が引き撃られたような感覚に顔を撃めて声をあげる。根元近くまでペニスを埋めてようやく腰を止める事が出来た龍平は「痛い？」と問いかける。「へいき」と返事がくるがどう見ても平気そうではない。その顔に動けなくなると綾夏は弱々しい声で囁いた。

「へいき、だよ……だから、動いても……大丈夫」

ここでまごついていたらそれこそ困らせてしまう。そう感じた龍平は頷くと「いくよ」と呟き腰をスライドさせた。拙くぎこちないピストンだが懸命な動きだった。

若く猛ったペニスがまだ破瓜の傷が癒えない中を擦ってゆく感覚に綾夏は「んん！」と唸り四肢に力を入れる。するとこの前と同じように脚が龍平の腰に巻き付き始める。

痛みが走ってそうなっているのだろうと思つた龍平はせめて少しでもと、挿入している部分のすぐ上にある陰核を親指で撫でてあげた。腰を拙く動かしながらクリトリスを弄ると快楽と苦痛が一緒に襲ってきて綾夏の頭を混乱させる。

「ほう！ ん！ あ、あ、つく！ ひあ、ひあうう！ ああ、んん！ んんあああ！」

少しでも楽に、気持ちよくなつて欲しい。その想いで親指を動かした。そしてピストンもゆっくり優しく行う。腰が疲れるので休んでは位置を変え振っているところある位置で痺れるような気持ちよさが龍平を襲った。膣内を単調に前後させていたピストンだったのだが、腰の位置を変えた時に上側の膣壁に擦るように突き込んでしまったのだ。

(……あ、これ……気持ちいい)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>